

博士学位論文審査要旨

2007年10月18日

論文題目： *The Confidence-Man as Melville's Apocrypha: The Pursuit of Man, Christ, and God Represented as a Biblical "Fool Play"*

学位申請者： 松本 加奈子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 林 以知郎

副査： 文学研究科 教授 塩尻 恭子

副査： 同志社大学名誉教授 岩山 太次郎

要 旨：

本論文はアメリカ19世紀中期を代表する作家 Herman Melville 最後の長編散文作品 *The Confidence-Man: His Masquerade* (1857年出版) を取り上げ、川船上で懐疑に満ちた乗客を相手に信仰と慈愛を説く信用詐欺師と乗客との間のやり取りを描いた本作品に現れる道化・愚者の両義的像を中心的な形象として考察する試みである。騙す者と騙される者としての詐欺師と乗客たちの関係はたえず反転しあい、また作中に張り巡らされた聖書への言及や登場人物たちが帯びる聖書における愚者像は相互に矛盾・対立しあっていくが、このような相克に満ちた聖書的「愚者劇」の中に浮かび上がる捉えがたきキリスト像の探求にこそ Melville の信仰の形を確認することが論考の最終的到達点となっている。

第一章では作品における舞台空間的設定の取り込みに着目し、道化・愚者という演劇的類型の諸相を考察する。風刺対象の愚かさを映し出す伝統的道化の役割を帯びた詐欺師の実体は、無垢なる愚者と愚者を装った狡猾な道化という両極の間を揺れ動くが、詐欺師像のかくのごとき多義性は、そもそも日常空間と舞台を自由に越境する存在である道化類型を介することで、船上の空間が非日常的異空間へと反転していく空間的流動を呼び込んでいく、と論ずることで第二章における聖書的世界における愚者の考察を準備している。

第二章では、「主を恐れる知恵を欠いた」旧約的愚者たちの前にパウロの聖句を掲げて登場する詐欺師に、パウロの説く「聖なる愚者」、すなわち地上の知恵からは愚者と写っても天上の知恵に殉じる信仰の愚者の像を見ることから論を起す。地上の愚者/聖なる愚者という極間の往還のかなたに浮上するのは、聖パウロ、ひいてはキリスト自体の面影であるが、とどまることなく変貌し続けていく詐欺師にパウロやキリストのいかなる相貌をも固定的に見取することは、ただちに信仰の虚偽化・独善化に墮していく。

第三章では、前章で展開した信仰の固定の回避という主題を、聖書そのものの本質とその深さに立脚した信仰の態度へと接続する。詐欺師と乗客の間で引用言及される聖書正外典がこの信仰と不信の揺れ動きのなかで検証され、聖書自体がその深みに湛える本質的相克への洞察へと及んでいくとき、信仰のあり方は疑いなき信でもなければ虚無的不信でもなく、信と不信の極間を往還し続ける、果てしない探求の形をとるに至る。そしてこの果てしない探求の形こそ、Melville が最終的に帰着した真のキリスト教信仰のあり方、正典に対する異端であるがゆえに真摯な洞察であり続けうる、外典（アポクリファ）的信仰の様態なのだと結論づけられる。

このように本論文は、脱構築批評や多声性概念などの批評理論を援用しつつ、聖書文献学・釈義法の成果に立脚した学問的精密さを損なうことなく、Melville 研究史においてもアポリアとされるこの作品を解読していく分析の手さばきとその真価を見取ることが出来る。

よって本論文は博士（英文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。

学力確認結果の要旨

2007年10月18日

論文題目: *The Confidence-Man* as Melville's Apocrypha: The Pursuit of Man, Christ, and God Represented as a Biblical "Fool Play"

学位申請者: 松本 加奈子

審査委員:

主査: 文学研究科 教授 林 以知郎

副査: 文学研究科 教授 塩尻 恭子

副査: 同志社大学名誉教授 岩山 太次郎

要 旨:

上記審査員3名は2007年9月26日午後5時から約2時間にわたり、学位申請者に対する学力確認の口頭試問を行った。

学位申請者は審査委員からの提出論文に関する専門的知識はもとより、関連分野への多様な質疑に対しても的確かつ詳細な応答を行い、学力水準の高さを証明しえた。

また語学(英語・フランス語)についても十分な運用力を備えていることが確認された。

以上の学力確認の結果により、学位申請者は博士(英文学)(同志社大学)に相応しい学力を有するものと判定する。

博士學位論文要旨

論文題目: *The Confidence-Man as Melville's Apocrypha: The Pursuit of Man, Christ, and God Represented as a Biblical "Fool Play"*
(メルヴィルの外典としての *The Confidence-Man*: 聖書的「愚者劇」として示された人間、キリスト、神の探求)

氏名: 松本 加奈子

要旨:

The Confidence-Man: His Masquerade(1857)は、Herman Melville (1819-91)の最後の長編散文であり、それ以前の作品の様々な特徴を色濃く反映しているが、その特異さと難解さのために、批評家たちを困惑させてきたアポリア的な作品である。本論文の意図するところは、舞台を思わせる船上で一見支離滅裂と見える不可解な言動を繰り返す主人公 the confidence-man を読み解く鍵として、伝統的な喜劇に登場する道化(fool)の形象と船の他の乗客たちに見られる愚者(fool)の様々な形象を分析することによって、表層のドラマの背後にある the confidence-man の、さらには作者 Melville の人間観や世界観を解き明かすことにある。

第 I 章では、*The Confidence-Man*の世界の表層を彩る演劇的道化・愚者のモチーフについて考察する。道化・愚者という演劇的類型を枠型として用いると、the confidence-manとその対話相手たちの間のやりとりは、伝統的な喜劇における道化と愚者たちの騙し合いと二重写しであることがわかる。それぞれの対話相手がthe confidence-manに付け込まれる心の際には、道化に振り回される愚者たちが表象する人間精神の弱さやそれを増幅する苦境の類型化に共通し、その結果として、物語の中の個々の人間の行為や心的構造の上に、人間についての洞察や存在に関する普遍的な問題が影を落とすこととなる。人々の愚かさを暴く役割を担うthe confidence-manは、伝統的な道化と同様、諷刺の対象となる愚者の姿を鏡のように映しているが、彼には無垢な愚者としての道化のイメージと愚者の仮面を利用して相手を翻弄する狡猾な道化のイメージの両方が想起されるため、一体彼は愚者であるのか知者であるのかという疑問が常につきまとう。この疑問は彼が典型として映し出している人間に対する疑問とも連関する。さらには、日常空間と舞台空間を自由に行き来する伝統的な道化の特徴を引き継ぐthe confidence-manが、二つの空間の垣根を揺さぶるため、何が現実であり何が虚構であるかという区分立て自体が流動化し、現実そのものが不条理な喜劇のように見えてくる。そこには、日常のドラマの上に非日常の別世界が浮かび上がる素地が用意されているといえる。

第 II 章では、船上世界に浮かび上がってくる別世界の中の最も顕著なものとしての聖書的世界に注目する。同一人物であるかどうかさえわからない the confidence-man の様々な顕現的形態を、その道化や愚者の仮面を通して重層的に映し出される聖書の愚者の概念との関連から分析する。「愚者の船」にも喩えられるフィデール号の乗客たちに重ねられているのは、「主を恐れ畏むという知恵」を欠いた旧約聖書の愚者のイメージである。一方、新約パウロ書簡の聖句を掲げて登場した the confidence-man が、パウロの説く「信仰の愚者」、そして地上的知恵から見れば愚かとなる天神的知恵に殉じる「聖なる愚者」、ひいてはその究極としてのキリストの役を演じていることは明らかである。しかしながら、それらの聖なる愚者の像は、詐欺師的人物によって聖書の世界とはほど遠い日常の場面において再演されることで、詐欺的な意味を帯びてくる。さらには旧約の救世主や福音書のイエスに関する描写や、パウロの解釈したキリスト像が、時にはこれらの諸要素の中に含まれる逆説表現までもが周囲の文脈から切り離されたまま継ぎ合わされた結果、

漠然と捉えられてきたキリスト観に関する矛盾や不可解さが強調される。聖なる道化なのか単なる道化なのか判別しがたい the confidence-man の仮面の背後には、聖なる詐欺師なのか単なる詐欺師なのか分からないほど曖昧に解釈されたパウロの姿が見える。そして、その向こうには、キリストの姿や教えがさらに霞んで見え隠れするのである。このようにして the confidence-man の正体を追うことはキリストを追うことと重なり合う。けれども、変化と流動性、捉えがたさを体現する演劇的道化と同様、あらゆる固定化を避ける the confidence-man に固定した枠組みをはめた瞬間、その枠組みは見る者を欺くための単なる仮面に過ぎないかのような虚偽性を見せ始める。彼の姿を通してキリストを追うことは、キリストの姿を明確にするどころか、キリスト自身を詐欺師のように捉えがたい存在にしてしまう。けれども、理性では納得出来ない論理で人々に信を求める彼の行為は、必ずしも人々を不信へと向かわせるためのものだとは言いきれない。ここにこの作品の難解さがある。不信に導くように見える彼の説教は、聖書における信仰への教えと響き合い、理性と地上的知恵を重んじる人々が不信に導かれる過程が、ある人々にとっては理性を捨てて「信仰の愚者」へと向かう過程となる可能性を残しているのである。しかしこの「信仰の愚者」が、単なる愚者や信仰の道化に過ぎない可能性も示唆されている。

第 III 章では、「信」と「不信」の相克を the confidence-man という一人物の言動に映し出される問題としてだけでなく、対話相手たちとのせめぎあいをも視野に入れて考察する。福音書やパウロ書簡の聖句を引用して人々に信と希望と愛を説く新約的愚者を演じる the confidence-man と対立する立場の人物たちもまた、旧約や外典の知恵文学の聖句を引合いに出して不信や警戒、世の無常を説くが、the confidence-man が「信」を、対話相手が「不信」を代弁するという構図で割り切れるほど単純ではない。対話相手を反駁しようとする姿勢を見せる the confidence-man の発言自体が、時には知恵文学の言葉と重なり合っている。パウロの言う預言的語りを再現するかのよう、複数の者が順次語るこの作品において、対立する二つの主要な声は、こだまが反響するように主人公の偽装や個々の乗客の区別を越えて様々な人物の口から湧き出て来て響き合い、逆の立場の声を圧倒しようと互いに凌ぎ合う。どちらの立場の言説も、平板な極論に聞こえるが、本来は矛盾や謎を孕んだイエスやパウロの言葉そのものにも酷似し、未だ解かれていない異言や預言である可能性も残されている。それを解こうとすれば独断的な解釈の戯れに陥るしかないという虚無的な見方を示唆しつつ、主人公は人々を不断の解釈の連鎖へと誘う。それは *Mardi* (1849) に登場する哲学者が、真実とは何かと問い続けること自体がいかなる答を導き出すことよりも究極であると述べたように、真実探求の問いを続けさせることを意図しているのか、それとも合わせ鏡の中で無限に増殖する自らの鏡像の海の中で溺れさせようとしているのかは明確ではない。モーセ五書、預言書、知恵文学、福音書、パウロ書簡、黙示録といった、視点や立場の異なる聖書の様々な箇所からの断片的なイメージや言葉が複雑に交錯する結果、再構築された世界は人間やキリスト、神、世界に関する謎をさらに深める。直接または間接的に言及される聖書中の様々な書は、特定の一面ばかりが取り上げられるが、時には乱雑に他の書と一括りにされ、時には対比されることで、逆にそれぞれが抱えていた矛盾や葛藤が目立つようになる。しかも、詐欺師的人物と詐欺師に騙されまいと警戒する人物たちとの間のせめぎあいという文脈の中に持ち込まれるというのに、何故か船上世界は、聖書を反転させた鏡像世界のようにありながら、歪んだ鏡のように本質を拡大して映し出しているように見える。作者 Melville は *The Confidence-Man* を聖書の単なるパロディや追補として終わらせるのではなく、聖書そのものの隠された本質を照らし出す作品にしようと挑んだのではなかろうか。*The Confidence-Man* は、宗教的真実とキリストの捉えがたい姿を追う Melville の独自の聖書釈義であり、聖書の外典と同様、異端的でありながらも、その異端性や洗神性は真摯な探究の帰結であるともいえる。ありふれた博愛主義者としてのキリスト像や、ありきたりな愛の書としての聖書解釈、現実のキリスト教徒のふるまいは痛烈に批判されてはいるものの、キリストや聖書は、批判の対象ではなく、真摯な探究の対象である。しかしながらそれでもなお聖書は、作品世界を貫く不信の源でもあり続ける。不信や懐疑の書が

信仰への道具の一つとして用いられる一方で、聖書の言葉をもとに不信と懐疑が引き出され、聖書の言葉の上にそれらが積み重ねられていくのである。また、世俗的現象が、キリスト教や聖書の枠組みと切り離されては存在しえない Melville にとって、宗教観は人間観でもあるため、人間一般の表象としての the confidence-man を追う探求は、いつしかキリストを追う探求となっており、それがまた人間存在の考察へと反転を繰り返す。「不信」の声は大きくとも、「信」を完全に圧倒して、この探求が終わりを迎えるということはない。作品冒頭で提示された「信」と「不信」の対立は、「不信」が優勢ながらも最後まで一進一退の攻防を繰り返しつつ平行線を辿り続け、どちらか一方への弁証法的解消に至ることはない。様々な角度から吟味される二つの立場は、互いに一枚岩的な確信を突き崩される危険に晒される一方で、相克を通して共に鍛えられ、次第に重みと奥行きを増していく。そしてこの探求はこれからも続くであろうという余韻を残したまま、the confidence-man は最後の対話相手と共に暗闇となった舞台を退場していく。